

V. 支援教育研究

目 次

- 1 はじめに
- 2 学校生活・授業のユニバーサルデザイン化の継承と発展
- 3 自分から声をかけられない生徒（関係をつくるのが苦手な生徒）
に対する手立ての確立
- 4 ユニバーサルデザインの授業・学級・校内支援体制づくり
- 5 学校全体で取り組む社会性の育成とユニバーサルデザインの授業づくり
- 6 ひらがな検討会について

1 はじめに

1 支援教育の調査研究について

通常の学級においても、学校生活に困難がある児童生徒の個に応じた配慮・支援と、特別支援教育の考え方を取り入れた授業づくり（授業のユニバーサルデザイン化）、学級づくり（個のちがいを認め合える集団づくり）の実践が進んでいる。しかし教員の入れ替わりが多く、学校全体での支援教育への取り組みについての継承が難しくなっている。今年度は、支援教育研究協力校において、中学校では梅花女子大学 伊丹昌一教授、小学校では神戸親和女子大学 森田安徳准教授にご指導をいただきながら、昨年度に続いてユニバーサルデザインの授業について研究すると共に、学校体制としての支援教育の継承について研究に取り組んだ。協力校の担当教員は教育センターの支援教育研究員でもあり、自校の取り組みを市内各校に発信し支援教育を推進してくれるものと期待している。

2 研究テーマ

全体テーマ：「インクルーシブ教育を目指した授業づくりと持続可能な支援体制づくり」
各協力校の研究テーマは下記のとおりである。

A 中学校	「学校生活・授業のユニバーサルデザイン化の継承と発展」
B 中学校	「自分から声をかけられない生徒（関係をつくるのが苦手な生徒）に対する手立ての確立」
C 小学校	「ユニバーサルデザインの授業・学級・校内支援体制作り」
D 中学校	「小規模校の特性を生かした社会性を育成するためのアプローチ」

3 活動概要

支援教育研究員連絡会

月に1回程度集まり、各校の研究内容を交流し研究を深めていった。

- 第1回：支援教育部門研究会について
- 第2回：各研究による今年度の目標（研究テーマ）の設定を報告
- 第3回：各研究の研究テーマ及び進捗状況の報告・交流
- 第4回：教育センターフォーラムリハーサル
- 第5回：教育センターフォーラム

教育センターフォーラム

平成31年2月20日（水）に開催された第6回茨木市教育センターフォーラムにおいて、4名の研究員と教育センター・巡回相談員が発表を行った。

2 学校生活・授業のユニバーサルデザイン化の継承と発展

菅野 徹

1 はじめに ～本年度の背景～

本年度は、本校に5～9年勤務していた教職員の大量異動などがあり、ユニバーサルデザインや支援教育についての理解度の深淺が二極化した状態でスタートした。また天災による臨時休校の多さから時間割変更が通年で生じ、戸惑う生徒と授業時数確保のため計画変更にとられる教員の負担など、さまざまな難しい状況乗り越えている只中にある。

2 今年度の取組み

今年度は「今までやってきたことを続ける」「昨年度試してきたことを実践していく」「何かにとらわれず試せることはやってみる」という方向に進めた。そして、教員には「生徒の困り感を自分事として捉えること」「生徒の様子や話から困り事を拾い上げること」「日常での意見交流を大切にすること」を意識することを確認し、支援教育コーディネーターは、校長・教頭と相談しながら、「教員が負担感を感じないようにするための工夫の模索」をし続けて、教員の過重な負担とならないことと教員同士をつなぐことの取組みを続けている。負担感の軽減については、すでに行っていることがユニバーサルデザインになっていることの再確認や、教員同士での助け合いが軸となった。

3 特別支援教育アドバイザーからの学び

梅花女子大学心理こども学部の伊丹昌一教授に年4回来ていただき、学校の現状に合うアドバイスを数多くいただいた。

(1) 巡回相談（5月、1月）

場面緘黙への対応、愛着の課題についてなどのアドバイスをいただいた。また机上の準備、整理ができない生徒への対応や、班活動に取り組みにくい生徒についての質問が教員からあり、対応の仕方や多様な生徒の活動を認めることを理解することが大切であると教えていただいた。

(2) 講話（8月）

夏休み明けに、「子どもの理解と支援について」というテーマで講話をいただいた。

- ① 1年生教員は、「肯定的に話をする」「だめなことは毅然と叱る」
- ② 2年生教員は、「毅然とした態度」「短い言葉での指示」「主導権を握る」
- ③ 3年生教員は、「共感」「幸せに生きることができるよう」
- ④ 学年外教員は、「診断名より、子どもの反応を見ること」

同じ講話でも、それぞれの担当する子どものことを思い浮かべながら聞くことで、捉えたポイントが異なることが、講話後のふりかえりシートでわかった。これを機に教員の支援教育の捉え方や考え方により変化がみられるようになってきた。

(3) 研究授業（10月）

1年生 理科「力の世界 ～ブーメランを作って飛ばす実験～」

授業研究テーマ「子どもをつなぐ主体的・対話的で深い学びのあるユニバーサルデザイン化された授業づくり」

昨年度からいただいているアドバイスや、反省を改善した点を盛り込んでおこなった。2学期よりプロジェクターが電子黒板にかわったことで、ICT機器のより効果的な使い方もできるようになった。授業の焦点化、視覚化、構造化、協働化も改めて確認された。そして、学力保障委員会が中心となって12月の研究授業や1月の授業交流週間につながっていった。

4 「継承と発展」についての成果と課題

(1) 教員の意識を変えて、実践して続けていくこと

小中学校における発達症は6.5%（40人学級では2～3人）というデータがある。学校生活の大半は授業であり、その授業を通常の学級で困りながら受けている生徒がいることを常に意識し、ユニバーサルデザイン化した授業づくりを進めること、そのために支援教育の視点を理解して、校内の各委員会、教員が動き出していることが一つの成果である。

(2) 子どもが正しい知識を得て、理解を深めることの大切さ

各学年とも、半期に1回ずつ障害理解学習を設定している。そこで正しい知識を学ぶこと、普段も折に触れてユニバーサルデザインや障害の社会モデルについての話をしていること、学級通信などにルビ打ちをして日常にさりげなく支援があることなどを通じて、理解を深めさせているのも成果の一つである。

(3) 業務改善が言われるなか、教員の負担をどう減らすか

例えば、ルビ打ちは一度文書を作成した後に打っていくことになるが、打つこと自体がすでに「負担」になっている。しかし、その作業を教員の助け合いでできれば、一人の負担は軽減される。教員のつながりがあれば負担を負担と感じなくなる可能性も十分に含んでいる。教員の世代交代が進み、20～30歳代の教員が多い。この世代が40～60歳代の世代ともつながり、助け合える集団を形成していくことが課題である。

(4) 「ICTアレルギー」からの脱却と「ICT万能主義へ陥らない」心構え

ICT機器を使いこなすスキル不足や効果の理解を深めていない「アレルギー」とICT機器への依存度が高い授業を展開する「万能主義」。この両極端な考えの差を縮めていくことは早期に解消していくべき課題である。

5 おわりに ～「人は変わる」～

2年間の支援教育研究協力校の事業に参加させていただいたことで、本校の教員の意識は変わりつつある。「人は変わる」と伊丹教授もご自身の経験でおっしゃっている。

本校は、支援学級の抽出授業を担当するのは支援学級担任だけではなく、多くの教員で担当している。また支援学級担任が通常学級での授業も担当している。インクルーシブな学びの場を作っていくためにも、教員がいろいろな場で学び、つながり、子どもとともに成長していける喜びを感じながら、日々の教育活動に取り組んでいくことを推進していきたい。支援教育が教員の可能性を大きく広げてくれると思うようになったことが私個人としても成果である。

3 「自分から声をかけられない生徒(関係をつくるのが苦手な生徒)に対する手立ての確立」

中村 仁一

1 はじめに

昨年度より、主体的・対話的で深い学びの実践として協同学習を進めた。多くの生徒たちがお互いに聴き合いながらつながりを深める中で【できた！わかった！】という経験を通し、達成感を得ることができた。しかし、その反面、自分から「わからないから教えて。」と周りにヘルプを求めることが難しい生徒もおり、大きな不安感や困り感を抱えていることも見えてきた。このような生徒たちにとってどのような手立てが必要かを考えていくことが今後の課題となった。

2 実践

(1) 校内研修 『発達障害をポジティブにとらえる』(笹森理絵さん)

発達障害の当事者としての経験や、母親として発達障害のある子どもの子育てをしてきた経験に基づいたお話をしていただいた。感覚過敏による生きづらさ、発達障害の特性による周りの人との視点、考え方、感じ方の違いから生じる困り感等を具体的な経験談を通して知ることができた。

生徒の一見問題行動に見える行動が、本当は困っているがゆえの行動であるかもしれないという視点をもってかかわっていくことや、すべての生徒が安心して学び合える集団をつくるために、教師が『なぜできないのか』という視点ではなく『どうしたらできるようになるのか』という視点で生徒にかかわっていくことの大切さを教職員全体で共有することができた。今後も、生徒とのかかわりや授業づくりの中で大切な視点として位置づけ、生徒自身が自分の中で抱えているしんどさをポジティブにとらえることができるような集団づくりをめざしたい。

(2) 校内研修 『子どものアンガーマネジメントと特性理解』(伊丹昌一教授)

自ら怒りのエネルギーをコントロールし、またその怒りのエネルギーを肯定的に使っていく方法について、5つのポイント(①怒りの原因 ②衝動的な怒りの予防 ③かたくなな考え方を変える ④上手な怒り方 ⑤怒ってしまったら)でお話していただいた。また、SSTの絵カードを使ったグループワークを行い、『周りの状況把握や他者の気持ちの理解、自分の気持ちの伝え方などに難しさを感じている生徒を理解し合う為の指導方法』について実践を通して学んだ。この研修を通して、あらためて教職員が笑顔で接することの大切さに気づくことができた。教えていただいた、怒りをコントロールするための方法(6秒ルール、魔法の言葉、私メッセージ、べき思考等)を、それぞれの教職員のスタイルに合った形で、生徒の気持ちに寄り添い実践している。また、SSTカードのワークは、今後の集団づくりに活用していきたい。

(3) 巡回相談（伊丹昌一教授）

巡回相談を経て発達検査を受けることになった生徒について、発達検査で見えた本人の困り感を教職員や保護者などの【周り】が理解するだけではなく【本人】にフィードバック（自己認知）していくことの大切さを教わった。またその方法についてSCと連携していくなどのアドバイスをうけ、実際につながることができた。しかし、本人が自身の困り感を認識し、本人の意向のもと具体的な支援につなげるまでにはいたらず、改めて自己認知の難しさを実感した。自分は何ができて何が難しいのかなど、自分を知り周りに発信できるようになることが、この先社会で生きていく中で必要な力になってくる。そのためにも、専門機関との連携や卒業後の進路を見据えた保護者との話し合い（どのような配慮が必要で、それを自分から発信できるようになるためにはどうしたらよいか）をしっかりと行い、本人が少しずつでも自分と向き合い、自分を知り、自分を大切に思い、周りをつながりながら成長していけることを感じられるようにしていきたい。

(4) 研究授業 家庭科 『基礎縫いを生かした弁当袋製作』（伊丹昌一教授）

- ①本時のねらい設定 ②本時の製作達成目標の設定
- ③作業手順、作業時間の提示 ④各班リーダーが中心となって製作活動を実施

協同学習≠言葉での伝え合い

協同学習というと、生徒同士のなかで言葉を通して学び合うことがイメージされるが、言葉で伝えあうことが難しい場合でも、周りの様子を見たり声を聴けることが協同学習であるということを知らせていただき、新しい協同学習の視点を持つことができた。また、見せてもらった時や教えてもらった時に「ありがとう。」と言えるようになることが大切だということも再認識できた。協同学習には、教職員のしかけやフォローも必要不可欠である。教職員が、生徒の実態や集団の中での立ち位置等を理解し、その生徒に合った『ほめるタイミング』『ほめる内容』をフィードバックしていくことで自信につなげていきたい。

3 二年間を振り返って

各教科で協同学習を取り入れることで、学びに消極的だった生徒が聴き合い、学び合うことに意義を感じ、自ら学習に参加できるようになってきたことは大きな成果と言える。今後は、生徒自身がお互いに安心してつながり、多様な考えに触れながら学びを深めることができる協同学習をめざす。そのための集団づくり（他者を知り、認め、受け入れる・自分を受け入れ、発信できる）は必須の条件と考える。

教職員も一つの集団として、日々の連携（ユニバーサルデザイン、合理的配慮、授業づくり、学級経営、生徒の交流など）を密に取り合いながら、笑顔で生徒たちと向き合うことを忘れず、学校全体として今後の取組みを進めていきたい。

4 ユニバーサルデザインの授業・学級・校内支援体制づくり

西島 葉子

1 はじめに

本校はマンションや住宅が建ち並ぶ場所に位置する中規模校で、地域や保護者は学校に協力的である。本校の支援教育は、子どもサポート委員会や支援コーディネーターを中心として行われており、学級担任を中心に、児童にとってわかりやすい授業になるよう工夫を行っている。しかしながら、様々な課題を抱えた児童も多く、より一層の支援体制づくりが必要となっている。今年度、支援教育研究協力校となり、子どもサポート委員会を中心に「ユニバーサルデザインの授業・学級・校内支援体制づくり」をテーマとして、支援教育について考え、実践した。

2 記録表を用いた行動分析

巡回相談で森田安徳先生（神戸親和女子大学准教授）に、課題を抱える児童に対してのアセスメントの方法として、児童の行動の記録を取るということをアドバイスしていただいた。そこで、対象となる児童の日々の記録を取ることにした。記録を取ることで、児童の抱える課題の原因や傾向を分析し、そこから支援の方法を考えることができた。

3 校内研修

テーマ「通常学級における授業づくり～ユニバーサルデザインの視点から～」

森田先生から授業のユニバーサルデザインの4つのポイントを具体的に教えていただいた。

- (1) 授業の構成…どこに目標をおくか、そのための1時間のスケジュールを示す。
- (2) 授業行動…授業時に教師が行う行動のこと。具体的な指示や説明の仕方など。
- (3) 授業ルールの明示…授業の準備、忘れ物対策、始業・終業時のあいさつ、学習態度など。
- (4) 教室環境づくり…すっきりとした黒板の周囲、物の置き場所、机・椅子の高さ調整、机の並べ方など。

4 研究授業

テーマ「みんなが楽しく活動できる授業をめざして」

～1年 国語科「すきなもののクイズ」～

みんなが楽しく自信を持ってクイズを作って出し合えるように、ワークシートや見通しを持たせるための予定表の工夫、具体的に教師が見本を示すことや1時間のスケジュールを示すことなどの工夫を行った。これらを行うことで、支援の必要な児童も意欲的に取り組むことができた。講師の森田先生からは、めあてを明確にして、それに対してのふりかえりを行うことや、活動の始まりと終わりを明確にすること、概念や言葉の意味を理解することが難しい児童への手立て、TTの役割などについてお話いただいた。

5 学校全体ですぐに使えるプリント教材作成の取組み

下学年の内容の復習が必要な児童に使えるように、各学年の学習内容のプリントを収納する専用の棚を用意した。支援学級で使っている教材も学校全体で共有できるようにしていく予定である。

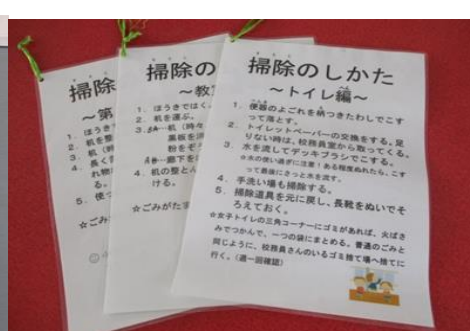
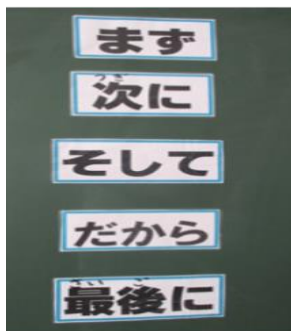
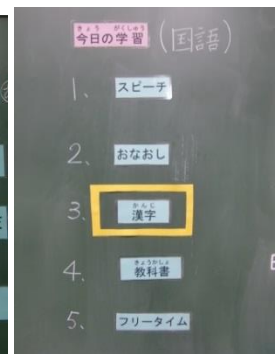
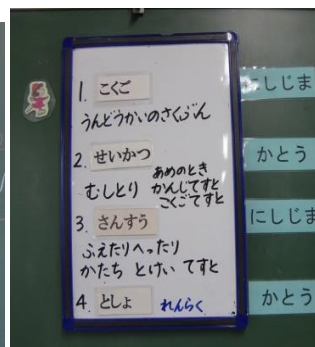
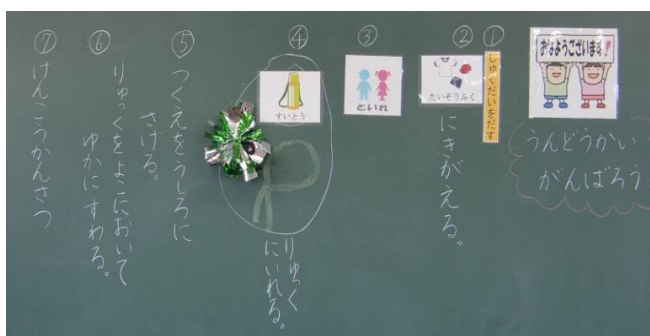


6 個別教育アセスメントの取組み

支援の必要な児童のアセスメントと引き継ぎを確実にしていくため、個人ファイルを作成。個別の指導計画や教育支援計画、引き継ぎ内容、アセスメントシートなどを6年分集約できるようにしている。

7 ユニバーサルデザインの授業・学級づくりの取組みの共有

各教員が実際に取り組んでいるユニバーサルデザインに関わる資料を集め、互いに参考にし、教員同士の学びになるようにしている。また、行った指導内容は、次年度の引き継ぎ資料にもできる。出し合ったものの中から、スタンダードにしていくべきものを今後検討していく。



8 おわりに

今年度は、個別の課題に対する支援の方法やユニバーサルデザインの授業のあり方を学校全体で学び、実践していくことができた。今後はさらに、学校全体のスタンダードにしていけるよう、取り組んでいきたい。

5 学校全体で取り組む社会性の育成とユニバーサルデザインの

授業づくり

岸田 風花

1 はじめに

本校は、全校児童の少ない小規模校である。限られた人間関係の中で多くの時間を過ごす児童たちは、相手に伝わるように話したり、初めての人とかかわりをもったりすることを苦手とすることが多い。しかし、中学校からは大人数の中で学校生活を送ることになり、中学校に入学してから学校に行きにくくなる卒業生もいるのが現状である。そのため、中学校入学を視野に入れ、社会性の育成を意識して取り組んできた。

また、小規模校であるからこそ、学年を超えて、学校全体でユニバーサルデザインの授業づくりにも意識して取り組んでいる。

2 取組み

(1) 社会性の育成のために

① 全校スピーチ

本校は給食を全校児童で食べている。そのときに1日1人スピーチをするランチタイムスピーチを行っている。全学年同じお題でスピーチを行い、聞いている児童は感想を伝えたり質問をしたりする。各学年では少人数の前でしか話す機会がないため、少しでも多くの人数の前で相手にわかりやすく話したり、自分の気持ちを伝えたりする貴重な場となっている。

② ソーシャルスキルトレーニング

スクールカウンセラーに協力していただき、自分が思っている相手のイメージと、その相手が本当に考えていることは違うこともあるということを知るためのワークを行った。「脳内メーカー」を使い、自分を表す文字やマークを9つ書き、なぜその脳内メーカーを作ったのかを説明するというものである。自分の脳内メーカーを作ることに苦戦している児童もいたが、自分のことを見つめ直すよい機会になった。児童は振り返りで、「知っているつもりでいた友達が意外なことを書いていて驚いた。」や「予想と同じところも違うところもあった。」というように、今まで気付いていなかった友達の一面を知り、先入観だけで相手を見てはいけないことに気付くことができた。

③ 演劇ワークショップ

コミュニケーション力の向上のためにプロの劇団の方に演劇を教えていただいて3年目になる。最初は恥ずかしくて声が出せなかったり、動きの小さくなってしまったりする児童も多かった。しかし大きな声、大きな動きだけが相手に伝わる表現ではなく、表情やちょっとした動きでも相手に伝える気持ちがあれば伝わることを練習のなかで学んでいき、表現することを楽しむことができる児童が増えた。

練習の成果は参観で保護者に見ていただいたり、昨年は大阪府の大会で 200 人以上の前で発表し、児童の自信にもつながっている。

(2) ユニバーサルデザインの授業づくりのために

①学校全体での取組み

すべての児童に役立つ支援を定着させるために、年度初めにユニバーサルデザインの視点から教室環境や指示の仕方等の確認を行っている。「ロッカーの使い方」「教室の前面の掲示はできるだけ避ける」「指示はわかりやすく簡潔に行う」「視覚支援を生かし、見通しをもって行動できるようにする」など基本的なことを全教員で確認して行っている。

各学年の児童の実態に応じたトレーニングを朝の会などに取り入れている。姿勢の保持が苦手な学年では体幹トレーニングを行ったり、板書を写すのが苦手な学年ではビジョントレーニングを行ったりしている。児童数が少ないため、児童の実態に合わせて工夫を行うことを全教職員が意識している。

②巡回相談

今年度は教育センターの巡回相談に加え、特別支援アドバイザーの巡回相談を受けさせていただいたことで、全学年を見てもらうことができた。巡回相談後のケース検討は全教職員が参加し、助言を受けている。学年を超えて全教職員がすべての児童を見守っていくことを大切にしている。また、1年生はひらがな聴写テストを実施し、夏の講話の際に到達度や課題、今後の取組みで有効なことについて全教職員で確認した。

③個別の指導計画の活用

支援を要する児童については保護者の承認を得て個別の指導計画を作成している。個別の指導計画を作成することで保護者と課題を共通理解することができたり、中学校へ確実に引継ぎすることができるため、積極的に活用している。個別の指導計画の内容は定期的に全教職員で確認し、校内でも児童の課題を共通理解している。

3 取組みの成果と今後の課題

限られた人間関係の中でのみ生活してきた児童が、中学校で突然大きな集団の中で生活することになるということを全教職員が意識して児童と接することができるようになってきている。保護者と協力して個別の指導計画を作成したり、中学校に向けて、小中交流や小中交流を積極的に行ったりと具体的な取組みを多く取り入れている。しかし、中学校入学後、学校に行きにくくなるという現状には大きな変化がないため、小学校のうちでできる工夫をもっと行っていかなければならないと感じている。教職員と児童の距離が近いため、つい手を貸してしまっていることや、授業中のソーシャルが疎かになっているということを助言していただいたので、日頃からできる工夫を学校全体で意識し、児童の社会性の育成に努めたい。

6 ひらがな検討会について

教育センター 支援教育巡回相談員 谷川友子 下田美穂 藤庭真也

1 ひらがな検討会について

(1) 目的

ひらがなの特殊音節は1年生の1学期に学習するが、どの子どもにとっても難しい学習内容であり、特に読み書きにつまずきを持つ子どもは、ひらがなの特殊音節の習得につまずきを示す傾向にあるとの研究が多数報告されている。ひらがなの習得は国語以外の学習においても重要であり、できるだけ低学年のうちに把握し、その背景要因に応じた対応をとる必要がある。学級担任がつまずきへの気づきと支援の手立てを持つために、ひらがな到達度チェックの実施を平成25年度より小学校に提案してきた。

(2) ひらがな検討会の実施方法

- 対象：小学校1年の児童
- 実施時期：2学期以降
- ひらがな検討会の進め方
 - ① ひらがな到達度チェックの実施
 - ② 採点・集計、誤り分析表の作成
 - ③ ひらがな検討会の実施

ひらがな到達度チェックとは

・**評価する文字**：ひらがな(特殊音節、濁音・半濁音を含んだ10個の単語)

・**方法**：聴写(クラスで一斉に実施)

*吹田市教育センター「ひらがな単語聴写検査」を参考に作成

巡回相談員と主に1年の学級担任で検討会を実施

(ア)クラスの誤りの傾向の分析とクラス全体でできる手立てについての検討

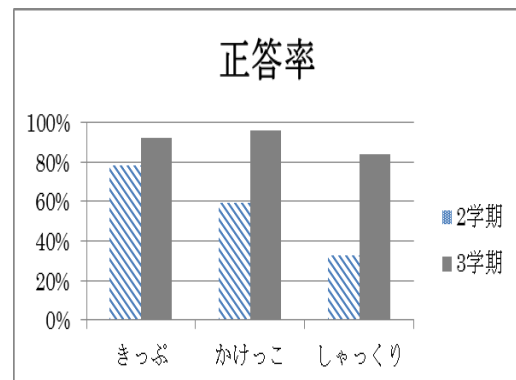
(イ)10問中4問以上誤りがあった場合に、ひらがなの習得につまずきがあると考え、誤り分析と指導法についての検討

2 ひらがな検討会後の各学校の取組みについて

ひらがな検討会の実施後、さまざまな取組みが行われてきたので、以下に報告する。

(1) A小学校の取組み(ひらがな到達度チェック実施：10月)

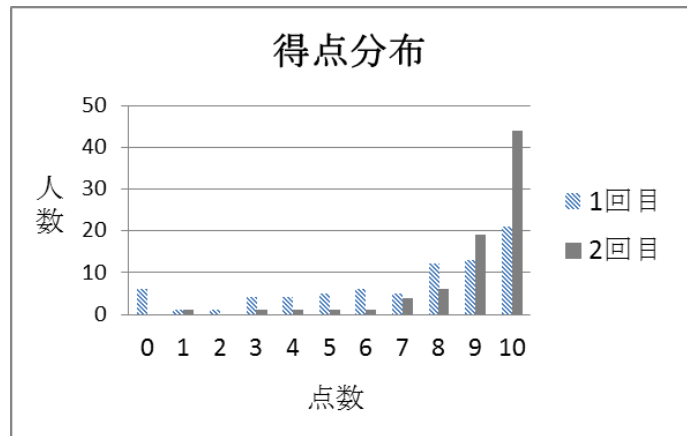
学級担任からは「思ったよりも書けていないことに気づきました。まだ、清音があやふやな子どもいることがわかりました。」との感想であった。分析すると、特に「しゃっくり」で間違える児童が多く、正しく書くことができたのはクラスの33%であった。クラスの優先課題を「促音」とし、授業で促音を書く機会を見つけて拍をとる指導を取り入れたところ、促音での正答率が伸びたことがわかった。



(2) B小学校の取組み(ひらがな到達度チェック実施：9月、3月)

1回目のひらがな到達度チェックで、6点以下が全体の35.1%であった。3学期の

業間休みと昼休みに、6点以下の児童を対象とし、ひらがな等の補習を支援コーディネーターや校長、首席、学力向上担当、学習サポーターが担当となり行った。3月にひらがな到達度チェックを再度実施したところ、6点以下は全体の6.6%まで減少した。個別に必要な支援をすることで、ほとんどの児童で大幅に改善した。

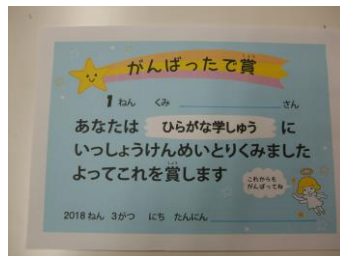


(3) C小学校の取組み（ひらがな到達度チェック実施：9月）

初めて取り組んだ際のひらがな到達度チェックの結果を受けて、学校全体で特殊音節の指導方法を年度初めに統一した。そのため、1年の担任だけでなく、どの学年で教える時にも同じ指導方法を取り入れている。

1年生では、学級全体での復習に加え、6点以下だった児童や気になる児童を対象に、毎年2月の朝学の時間に別室でひらがな学習会を実施している。支援委員会が中心になり、学力向上の担当者、担任が協力して8回開催する。8回分の指導プログラムを作成しており、教材は事前に支援委員会が準備するため、担当者の負担感はないとのことである。この取組みはすでに3年間継続している。

保護者の承諾を得る、児童にごほうびシールや表彰状を贈る、本人、周囲の児童への説明などのていねいな配慮も行っている。



3 まとめと今後の展望

ひらがな到達度チェックを活用した取組みは、平成25年度からスタートし、今年度までに市内全小学校で実施するに至った。今回報告したように、学校独自の取組みを展開する小学校もあれば、今年度初めて実施した小学校もあるが、ひらがなの習得状況から読み書きが苦手な児童を把握し、適切な支援を行っていくことの重要性は少しずつ浸透してきていると思われる。この取組みを通して、教員の子どもを見る視点が増え、ひらがな到達度チェックを活用した支援が進んでいくことに期待したい。

また、今後はカタカナの検討についても行っていきたいと考える。カタカナは学習時間が少なく、使いながら覚えていく状況にあるため、児童によって習得に大きく差がある。また、漢字のパーツに入っていることが多いため、カタカナを正しく読めて書けることは、漢字のスムーズな習得につながると考える。そこで、小学校2年生の1学期にカタカナ聴写チェックを取り入れ、個々の習得状況を把握することを提案したい。